福者アルバロ・デ ル・ポルティーリョ の著作から

諸徳に関する教令は、Vir fidelis multum laudabitur (忠実な人は多くの祝福を受 ける) (箴言28.20)という聖書 の言葉をアルバロ・デル・ポ ルティーリョ司教に当てはめ ています。事実、ドン・アル バロは、神と教会、オプス・ デイへの忠実を貫き、人々へ の奉仕で一生を送りました。 それは特に、1975年6月26日 の聖ホセマリアの帰天後、最 初の後継者としてオプス・デ イを率いることになってから

2016/03/15

目次

- 1. 聖性への招き
- 2. キリストに従う
- キリストは私たちを急き立てておられる
- 4. 社会の中の観想者

1. 聖性への招き

イエスのお望みは私たちが聖人にな ること

(1982年6月26日聖ホセマリアの帰天 記念日の説教。1992年マドリードの Rialp社出版の『Una vida para Dios』p.214-p.215)

信徒と教会の使命

「あなた方は行って、全ての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父、子と聖霊の名によって洗礼を授け守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなた方と共に付ってりまで、か最後の晩餐で「私を世におられたしました。」(ヨハネ17.18)

と仰せになったことを思い起こさせます。第二バチカン公会議では次のように解釈しました。「教会は、使徒たちから、救いの真理を告げよというキリストの厳然たる命令を、地の果てまで実行すべきものとして受けている。」(『教会憲章』17番)

教会の使命に関して話すとき、それは、あたかも祭壇から語りかける人たちだけに当てはまるかのように考える危険があります。しかし、キリ

ストが弟子たちに託された使命は、教会の全構成員が果たすべきことなのです。信者はそれぞれの方法で共通の仕事に一致協力するように。(『教会憲章番』30参照)

(1989年の説教。1989年の"Catholic Familyland"p.11-p.14)

キリストにおける神の子としての聖 性

私たちは、神の養子としての状態を、外的な肩書のように考えに似たというに対したのは、単になることを明れないとなったとれたなのは、からないないです。とです。それは、一次よりではいいに送ってくださいに送ってくださいに送ってくださいに送ってくださいた。

(ガラテア4,6)ことを、強調したのです。貴い主人公の役目を与えられた私たちは、偉大な真の神秘に出会いました。このことを度々、黙想しなさい。御父と御子の一致の絆・聖霊ご自身が私たちの内にお住まいなら、私たちは神の子であり、キリストにおいて生きていることになります。

私たちは、ipse Christusキリストと同じです。主と全く一つになっているのです。その結果、子としての信頼を持って神と付き合うよう招かれています。私たちが愛情を込めて「アッバ、父よ」と呼びかけ、全てを主に委ね、主は、一日中を愛と祈

苦しみ、不名誉、貧困、迫害のさなかにあっても、聖人たちはなぜ平和に満たされていたのでしょうか。答えは非常にはっきりしています。キ

願と賞賛の対話にするようお望みで す。(1990年1月24日、司牧書簡)

聖霊の働き

超自然的生活において-聖パウロの教えによると-「聖霊によらなければだれも『イエスは主である』と言うことができない」(1コリント12,3)、聖霊の助けなしにはどんな些細な行いにさえ永遠の価値を与えることができません。聖霊は私たちが神の子であるという事実を味わわせ

つつ、「アッバ、父よ」と叫ぶよう 力を貸してくださいます。聖霊は弁 護者として、内的生活の闘いにおい て私たちを守ってくださいます。神 の賜を私たちにもたらしてくださる 使者であり、私たちの心に、全世界 に蒔くべきgaudium cum pace喜び と平和を注ぎ込んでくださる慰め主 です。(1986年5月1日司牧書簡)

教会の聖人たち、神の子供たちの家 族

Omnes, cum Petro, ad Iesum per Mariam!この僅かな語句に、私たちが聖人になり、キリストの共同救済者になるために従うべき行程が要約されています。度々黙想してきた「わたしは地上から上げられて、全ての人をわたしのもとに引き寄せる」(ヨハネ12,32)というキリストのみ言葉を思い出してください。全ての人を引き寄せ、でのこと、全ての人を引き寄せ、て教会の中でペトロと一致している

人共々、私たちをご自身に引き寄せ られます。聖霊降臨のときにおこっ たことを良く考えてください。ペト 口と弟子たちの働きで数多くの民族 や言語の人々が洗礼を受け、聖霊の 賜を授かったのです。その日、三千 人余りの人が教会の一員になりまし た(使徒言行録2,38-41参照)。わか りますか。聖霊は、私たちがキリス トと一体となるためにキリストに引 き寄せ、ペトロの後継者であるロー マ教皇一共通の父親一を家長とする 神の子供たちの家族にして下さる御 方です。この計り知れないほどの素 晴らしい出来事を十分に深く知るこ となどできません。また、神に対し てふさわしい感謝を捧げることもで きないでしょう。神は、私たちが聖 三位一体の神的生命に参与できるよ うにしてくださり、「御子において 子となる」(現代世界憲章、22)と いう状態に私たちを高めて下さった のです。(1991年8月1日司牧書簡)

教会に仕える

ペトロの舟は、何度嵐にあっても沈 むことはありません。イエスが共に いてくださるのですから。ペトロの 舟は生ける神の御子イエスのものな のです。私たちは心をこめて聖なる 教会に仕えなければなりません。キ リストが、ご自分の教会を築くため に協力するようにと私たちをお招き になったからです。この建設は、全 キリスト信者の適切な協力によって 主が前進させてくださいます。その 神秘体、選ばれた民を常に成長させ てくださるのはイエス・キリストで す。(1988年5月2日説教、1998年 [Romana] IV, p.101)

教皇様との一致

主に忠実でありたいと申し上げましょう。忠誠であることによって私たちは、ペトロという基盤から離れまいと努力するでしょう。さもないと神の神殿であるはずの私たち一人

ひとりが崩壊してしまいます。ペト 口の後継者であり、地上におけるキ リストの代理者であるローマ教皇と その教導権に一致し従うことが不可 欠です。ですから私たちは教皇様が どなたであろうと愛し、喜んで人間 的超自然的な愛情を表明します。教 皇様との一致を保つことは主のみこ とばへの忠実を示す唯一の方法で す。主はsuper hanc petram aedificabo Ecclesiam meamと仰せ になりました。教会は、聖霊を通し てキリストが一そして私たちは主と 共に一築いていきますが、その礎は 主ご自身が据えられたものです。で すから、ペトロと共に、ペトロの下 で、つまり教皇様と共に、そしてそ の権威の下にいつも振舞う以外の道 はないのです。(1988年5月2日の説 教、1988年の『Romana』IV, p.101)

2. キリストに従う

祈りの生活

この祈りの時には、恩恵の助けによって、私たち一人ひとりに対する神の、み旨一聖性一と私たちの人生の確固たる完全な奉献という全面的な応答を求める愛のこもった要請とを、完全に再発見することでしょう。(1987年11月1日の司牧書簡)

福音を知り、福音を生きる

子よ、この小さく哀れな、極貧の馬 小屋、吹きさらしの家畜小屋を倦む ことなく観想しなさい。「神よりの

神、光よりの光|(ミサ聖祭のクレ ド)と宣言するとき、産着に包まれて 飼い葉おけに横たわる主イエスを見 出し、神として礼拝します。確かに 神なのですから。「神よりの神、光 よりの光、まことの神よりのまこと の神 | (同)を礼拝するのです。お望 みでしたら何一つ不自由しない宮殿 でお生まれになることもできたで しょう。ベトレヘムには何もありま せん。二つの宝以外には頼るものが ありません。それは、主の御母マリ アと聖ヨセフです。聖母は、主が十 字架上で亡くなる際に残される唯一 の宝石となられる方であり、その 後、私たちにゆだねられることにな ります。主イエスは御母と養父ヨセ フをどれほど愛されたことでしょ う。

あの愛すべきお二方と幾らかの産着を持っておられただけでした。後で、天使から救い主のご誕生を知らされた貧しい羊飼いたちか礼拝に

やってきました。すぐさま天使の大 群が「天のいと高きところには神の 栄光、地には善意の人に平和あれ」 (ルカ2,14)と歌いました。主がもの の人にお望みの平和を自分のできるのは善意の人たちだけで あなたと私が主に近づき、主をを び、主を愛するという善い決記を し、主を愛するとはを思います。 (1976年12 月25日、降誕祭の説教)

主のご受難

ゲッセマニの園でのイエスに思いを 馳せましょう。身近に迫ったことを ご存じでしたから、あの恐中にごち向かう力を祈りの中にどる なにお求めになったことでしたら。 あの時、聖なるご人性は友人にいる。 物理的にも精神的にもそばにいることを なとなさいました。使徒たちは は主を孤独にさせます。「シモン、

あなたは眠ったのか。ただの一時間 も目を覚ましていることはできな かったのか。 | (マルコ14.37) 同じ ことをあなたにも私にも言っておら れます。私たちはペトロのように何 度も死ぬまで主にお伴をしますと断 言しながら、度々、主を置き去りに して眠り込んでしまったからです。 このように自分が主を置き去りにし たこと、また他人がそうしたことに 対して心の痛みを感じるべきです。 私たちは毎日、什事上、使徒職上の 義務遂行を疎かにしているとき、信 心が表面的で雑に流れるとき、負担 や疲労を人間的に感じて自分を正当 化するとき、霊魂と肉体が抵抗して み旨に従属することへの神的喜びに 欠けるとき、主を置き去りにしてい ると考えるべきです。

ゲッセマニでの捕縛の後、カイファ の邸までイエスについて行き、衆議 所の裁判一冒涜的なデッチ上げ一に 立ち会いましょう。ファリザイ人、 律法学士たちの侮辱、偽証人たちの 中傷、司祭長の下男のごとき臆病者 からの平手打ちを浴びせられ、恐れ おののくペトロの否む声が聞こえて きます。われらの主イエスの御苦し みはどれほどであったでしょう。私 たち一人ひとりにとってなんという 教訓でしょう。その後ピラトの前で の裁判です。この男は臆病者です。 キリストに何の犯罪も見出せなかっ たのですが、正しい行動に伴う結果 に向き合う勇気にも欠けていまし た。まず策を弄します。だれを釈放 して欲しいか。バラバか、それとも イエスか(マタイ17,17参照)。この方 便に失敗すると、兵士たちに命じて 鞭打ちや茨の冠で主を苛みます。 (1987年4月1日の司牧書簡)

ゆるしの秘跡

教皇ヨハネ・パウロ二世は一度ならず、オプス・デイには「告解のカリスマ」があると言われました。私た

ちが人々を告解に近づけ、また司祭 の場合には骨惜しみせずこの秘跡を 司るよう熱望するのは、神の特別の 恩寵です。これには深い意味があり ます。赦すことは両親特有のことで あり(神学大I,g.21,a.3,c全参照)、私 たちはオプス・デイの精神に導かれ て、無限に憐れみ深い父として神を 見つめます。敬虔な子として神にゆ るしを願うことは、神と親密に接し ている証拠です。創立者は(聖ホセ マリア)、痛悔するのを非常に重要 な信心の一つと見做し、それゆえ神 の全ての赦しとあわれみを与える告 解の秘跡を心から愛し、私たちにも そう教えました。「よい告解に勝る 痛悔と償いの行為はない」(1972年2 月)からです。(1993年1月9日の司牧 書簡)

私たちが誤ったり罪を犯したりした ら、あわれみ深い神は、特に平和と 和解の秘跡・ゆるしの秘跡において 助けてくださいます。必要ならいつ でもゆるしの秘跡に赴き、罪を清 め、神の恩恵を取り戻し、ご聖体を 頂くことができるようにすべきで す。聖体には「教会のすべての霊的 富が含まれている。すなわち、われ われの過越、いのちのパンであるキ リストご自身が、聖霊によって生か され、また生かすご自分の肉を通し て人々にいのちを与えられるので す」(『司祭の役務と生活に関する教 令』5番)。あなた方も、たとえ大罪 がなくても度々ゆるしの秘跡を受け なさい。ゆるしの秘跡は、あなた方 が神の栄光と人々の救霊のために喜 んで平和の戦いを続ける力を与える からです。(1985年3月30日、世界青 年の年の晩の集いでの説教。1985年 の 『Romana』 I,p.62-p.63)

自分をよく知る:糾明

これからの人生のために新たな戦い を皆さんに提案します。それは良心 の糾明を丁寧にすることです。神が 求めておられることとしてこの戦いを受け止めなさい。糾明は、現実的な一業一献身によって、神への愛を日々活きいきとさせる第一歩であり出発点だからです。心を込めてこれを入りに配慮することは、生ぬるさに配慮することは、生ぬるさにであることは、生ぬるさにであることは、生ぬるさにであることにできることを防ぎ、罪の機会から遠ざけてくれます。

心の清さを心から望むなら、あらゆ ることに主を見ることができるよう になるでしょう。ですから本当にま じめに毎日良心の糾明をすることが 必要なのです。習慣的に、表面的な ことだけで糾明を終えて満足してい る人は、生ぬるさにつながる無頓着 や霊的鈍感の坂道を下り始めること になります。このような近視眼的な 見方は、善と悪、神からのものと自 分の情欲あるいは悪魔からのもので あるかを識別できないようにしてし まいます。(1976年12月8日の司牧書 簡)

誠実

糾明の時には、イエス・キリストとの親密さから引き離すことになる大なり小なりの動機や機会を勇気をもって見つけ出すために、行ないや怠りについて一つひとつその原因を探ることです。

主の御前で熟考し、ある徳を獲得するため、あるいは悪い習慣を取り除くために、どのような手段を講じるかを考えます。(1976年12月8日の司牧書簡)

ミサ聖祭はキリスト信者の生活の中 心であり礎である。

信仰の人には、祭壇上の犠牲がこの世で行なわれる最も感嘆すべきものであると解っているのです。ミサに与ること一司祭にとっては捧げること一は、人間に固有な時間と空間というはかない絆を断ち切って、ゴルゴタの頂上に立ち、私たちの罪ゆえ

にイエスが亡くなってくださったその十字架の傍らで、贖罪の犠牲に積極的に参加することを意味します。

全人類の解放、われわれの霊魂と身 体の贖いが成就されつつあると知っ て、あの残忍を極めたときに、聖 母、聖ヨハネ、聖なる婦人たちと共 に、キリストのおそばに付き添うと いう恩恵が私たちに与えられたとす れば、私たちはどのように振る舞っ たでしょうか。勿論、イエス・キリ ストが、父なる神に私たちのために 捧げてくださった時、ずっと、礼 拝、感謝、償い、祈願において、我 らの贖い主との親密かつ直接的一致 を求めたことでしょう。(1986年4月 1日の司牧書簡)

私たちの生活とミサ

私たちの日常生活はミサが「中心」です。ですから、私たちの思考、行いの一つひとつと関係があるべきです。あなたの生活に、ミサ聖祭と無

関係に展開するものが何一つあって はなりません。ミサの中で、私たち の奉献の完全な模範となるお方に出 会うのです。愛に高鳴る生けるキリ ストがあそこにおいでになります。 何もしていないかに見えますが、神 秘体全体と共に一ご自身の人々と共 に一完全にして終わることのない燔 祭において、礼拝、感謝、我らの罪 の償いおよび賜の祈願を父なる神に 絶えず捧げておられるのです。秘跡 においでになるキリストは、ありの ままに、救霊に全存在を捧げるため の永続的で喜ばしい刺激を下さいま す。(1986年4月1日の司牧書簡)

ミサ聖祭における共同救済者

私たちの全存在が共同の救済であるべきならば、ミサ聖祭であなたの生活は共同救済的側面を獲得し、そこから力を得、そして、とりわけその力が明らかにされるということを忘れないで下さい。ですから、ミサ聖

祭は内的生活の「根源」なのです。 この根源にぴったりと結びついてい るべきですが、これも私たちの受け 方応え方にかかっているのです。こ のことから、私たちの奉献の価値 は、私たちのミサがどうであるかに よります。我々のパドレの言葉を具 体的に解説しましょう。超自然的に 話すならば、私たちの生活の効果 は、イエス・キリストとその贖いた いという思召しに一致して、祭壇上 の聖なる犠牲を執り行い、あるいは それに与るときの信心、信仰、敬虔 の程度にかかっているのだというこ とです。事実、聖なる犠牲(ミサ聖 祭)において日々の戦いで消耗した 力を回復し、聖化と使徒職への意欲 で充たされます。(1986年4月1日の 司牧書簡)

始めることそしてまた始めること

強い人になるため主により頼みま しょう。私たちが続けるべき霊的戦

いには勝つときもあれば負けるとき もあります。しかし、皆、希望に満 ちて戦わなければなりません。誰も この個人的な内的戦いから逃れるこ とはできません。内的生活において 戦わないことは敗北を意味します。 しかし、何度でもやり直すことは勝 利を意味するのです。ローマの Milvio橋の近く、コンスタンチノが 勝利を得て、キリスト教徒の迫害が 幕を閉じ、教会の新たな歩みが始 まったところのアーチの上に Victores victuri乗り越える者が勝利 者、という碑銘があります。息子と 娘よ、敗北を喫しても、毎回やり直 すなら、神の御助けであなたは勝利 者と呼ばれるでしょう。主にとって は、勝利の冠を与えるため善意だけ で十分なのです。(1988年7月24日、 スペインの聖母巡礼地・トレシウダ での説教)

キリスト信者の希望

Possumus! (マルコ10,39)できます。罪を犯し、哀れな存在であっても、私たちは聖人になれます。神は善良で全能であられるから、また私たちは神の御母を母としているから。そしてイエスが御母に「いいえ」と言うことなど決してなさらないからです。

希望にあふれ、全面的に信頼しましょう。惨めさにも関わらず、私たちは聖人になることができるのいるのいる日も戦ってるいいを清めないがでいるのののでは、天国から降っているらいがでは、三のパンには、主がであるなら。このパンには、ご霊魂があるなら、の御体と御血、ご霊魂があるともども実際に現存されているの性ともども実際に現存されているのです。

魂を神にお返しする時が訪れても、 恐れることはありません。私たちに とって死は住いを替えることですか ら。それは神がお望みのときに訪れるでしょう。私たちが解き放たれ、本当の命、つまり永遠の命が始まるときです。(1989年8月15日、スペインの聖母巡礼地・トレシウダでの被昇天祭の説教。1989年『Romana』V,p.243)

聖母の母なる御手によって

子としての信頼をもって神の御母に より頼みましょう。聖母は必ず神な る御子に導いてくださいます。 Omnes cum Petro ad Iesum per Mariam. こうして私たちは必然的に 教会と教皇様を愛しつつ歩みを進め ることになります。私たちの祈り一 イエスの聖心のように普遍的なもの でありたい一を聖母の御手に委ね、 教皇様のため、司教と司祭、全ての 信者と全ての人々、特に、悲しみや 苦しみに苛まれている人たちのため にお願いしましょう。私たち全員が 母なる汚れなきおとめの御手に導か

れて、神が主を愛する人たちのために準備された(1コロサイ2,9参照)永遠の命にいたる確実な道を前進することです。(1988年12月8日、ローマの聖エウジェニオ教会でのマリアの無原罪の祭日の説教。1988年『Romana』V, p.287)

よい子供として単純に、聖母と共にあらゆることをなし、全てのために聖母を頼りにしましょう。創立者(聖ホセマリア)が教えたように「神の知恵に基づいて」生きることを学ぶため聖マリアに目―知性と心を学ぶため聖マリアに目―知性と心を対しましょう。そうする心にないのできる心、償いのできる心になるでしょう。(1978年1月9日の司牧書簡)

3. キリストは私たちを急き立てて おられる

Regnare Christum volumus!

Regnare Christum volumus! キリストが支配しますように。主イエスも支配することをお望みです。したないですることをお望みですとはなり、とこれをでも人々の自由のでも、とってもないです。人知だとしてするとをご存知だとしてするとをご存知だとのです。というです。というです。というです。というでははいいい。

聞き入れてくださいます。しかし、 私たちが来る日も来る日も執拗にお 願いすることをお望みです。(1988 年2月3日のお説教・アメリカにて)

神への信頼

私たちは何もできないし、何も知ら ない、無に等しい存在です…。しか し、主は完全なお方で、全てをご存 知で、全てのことがお出来になりま す。私たちが、素直な道具としてイ エス・キリストの御手に全てを委 ね、みことばに信頼して沖に漕ぎ出 すなら、困難は煙のように消えうせ てしまうでしょう一たとえ体は傷つ き、傷跡が残ったとしても一。そう して、神に飢え渇いているこの世は 花にあふれ、果物も実る緑深い庭園 になるでしょう。(1978年9月24日、 司牧書簡)

私たちの生活全体が使徒職である。

「第一にいのり、次に償い、三番 目、実に三番目に活動がくる| (『道』82番)。すべてを祈りに変え ることができますし、またそうすべ きです。私たちの生活全体が使徒職 であることを忘れてはなりません。 ミサ聖祭に支えられた仕事が使徒職 なら、家庭における聖化する熱意 も、活動に先立つ祈りと犠牲という 手段によって私たちは、「あなたが たは行って、すべての民をわたしの 弟子にしなさい。彼らに父と子と聖 霊の名によって洗礼を授け」(マタイ 28,19)る、という主から託された使 命の根本的な部分を果たします。 (1992年3月19日、司牧書簡)

人々を神に近づける

Caritas Christi urget nos (2コリント 5,14)、キリストの愛が私たちを駆り立てます。職業を通して、人々との付き合いをキリスト教的意味と正しさに潤されたものにするべきです。

「大工の息子」(マタイ13,55)であられたイエスのように、どのような環境においても、人々と神的で人間的な会話を始め、自分の振る舞けれたもので、兄弟たちを惹きつけなりません。人々がこの世の現実会がなりません。「神的なもの」と出げられる人間的な枠組みの中には、りまため、仕事関係によって築き上げ当然神の足跡が入っていなければなません。(1991年12月1日の司牧書簡)

友情と親しい語り合いの使徒職

友情とは何ですか。それは人に会い、挨拶を交わす間柄のことではいるとではなく、理解していません。そうではな棒げ、引きの人のために犠牲を捧げ、引きるこれを持って前れたこうすると当然、私のではない。そうすると当然、私のではます。そうすると当然、私のであるだちと共有したいと思うよ

うになるでしょう。それこそ自然な成り行きです。自然さを欠いているわけではありません。岩からほとばしり出る泉のように、努力なしにそうなるのです。

友だちと真の友情を育みなさい。弁 解し、理解し、愛し、手伝いなが ら。そうすると、その友だちは、遅 かれ早かれ、あなたに心を打ち明け るようになるでしょう。人は誰でも 時々心を開く必要があります。私た ちには苦しいことがあったり、誰か に相談したりすることがあるもので す。喜びがあると他の人たちと分か ち合いたいと思うものです。全ての 人は心を開くことのできるところを 求めます。それはちょうど用水路、 あるいは水力発電などのための貯水 池にたとえることができます。必要 以上に水が増えたら、適当なところ に流すはけ口が必要です。同じこと が霊魂や心にも言えます。排水溝、 はけ口が必要なのです。

では、人は誰に心を打ち明けるでしょうか。友だちや愛するたととがるなたととがるなった、これでしないとを高んなことをある。とをあるないとをいるのでしたがるないとをいるのでしたがあるとは一神の値し、気にはないた心を癒し、はたけるではかけることができるのにした。またすることができるよう。くて(1988年2月22日、家族の集まりのより)

大胆さ

全能にしてあわれみ深い神に頼るのですから確固たる自信に満ちて、オプス・デイの最年長者から、召して近たばかりの人に至るまで、楽観主義で、皆一人残らずこの重荷を担う幸せと幸いな責任感を持つ必要があります。なぜなら、これは主が私たちにこの世を遺産としてお与

えになった結果ですから(詩篇2,8参照)。また、明らかに卑小な私たちであるにもかかわらず、愛徳と剛毅の徳をもって人々を正しい道に導くよう協力せよと主がお求めになっているからです。最初の十二使徒に言われたように私たちにも「私の名によって網をおろしなさい」(ルカ5,4)と仰せになっているのです。(1985年12月25日の司牧書簡)

喜びをまき広める

急ぐべき時が訪れました。世界中が、キリストから遠ざかり、怒りや悲しみに満ちています。不安や恐れのうちに生きている人たちに、希望に満ちた楽観的な心と喜びを植え付けなければなりません。これは偉大な仕事です。人々にgaudium cumpace 喜びと平和をもたらすことですから。一それを創立者(聖ホセマリア)は、力強い筆跡で記した一しかし、私たちの心が喜び、しかも比類

のない静かな喜びに充たされるのは 聖母と共にあるときだけです。この とき初めて付き合っている人たちに も私たちの喜びが伝わっていくので す。(1978年1月9日の司牧書簡)

貧しい人々と病人の訪問を通して、 苦しんでいる人々に真の理解と愛情 で織りなされている愛徳の香油を提 供し、キリスト信者の結束を誠実に 実践したいものです。(1987年5月31 日の司牧書簡)

4. 社会の中の観想者

みことばは人となりこの世を聖化す る

「み言葉は肉体となって、我らのうちに住まわれた」(ヨハネ1,14)のです。これは神の愛の偉大な奥義で、降誕祭に特にあらわにされることです。万物がによって造られた(ヨハネ1,3参照)み言葉は、真の神であることをおやめにならずにご託身なさい

ました。人間の心で愛し、私たちと同じように自らの手で働き、罪以外私たちと同じ限界や疲れを感じられたのです。そのときから、全ては新しい意味、新しい価値を持つようになりました。(1991年12月1日の司牧書簡)

仕事を聖化する

良い仕事をすることと愛のために働 くこととは、密接に一致しており、 三位一体の愛と上智の一致を反映す るものです。人間的及び超自然的完 全性を求めて、良く働くためには、 愛のために努力することが必要で す。私がここで言いたいのは、ある ことにおいてすばらしい結果を得る ことではなく、私たちが払うべき献 身ということです。良く成し遂げら れた仕事は、うまくいった仕事と同 じではありません。ミツバチは完全 な巣を作り、非常に美味しい蜂蜜を 作りますが、愛することができない

から<働く>とは言えません。大切なことは内的な態度であって、結果ではありません。「主は心を見抜く」(1サムエル16,7)と聖書にありますが、そこにこそ良くできた仕事か、粗雑な仕事かの鍵があります。(1991年12月1日の司牧書簡)

神に面を向けて働く

いつも人にではなく神に面を向けて 働きなさい。主は、もっとも一人の とりの努力をご覧になってためこと から。全ては神の栄光のた全でなから。全ては神の栄光して全して全 一Deo omnis gloriaーそして全トして 人間的な活動の中心にキリスってを働い。主イスの東ストをして、聖なさい。主がより、一致 をなされるその贖いのみ業に固く一致 して働きなさい。(1984年10月1日の司牧書簡)

現代社会を聖化する

社会人としてのメンタリティーと司祭的魂を併せ持つ召し出しを有する私たちは、受身的な態度のままでいたり、あるいは世の中の傍観者でいることはできません。全被造物を三位一体に引き上げるよう奮い立つべきです。

それゆえ子供たちよ、剛毅とイニシアティブが必要です。神は、私たちの自由と責任感そして社会人とお見います。私たちは食物全体にといるないます。私たちは食物全体に滋味のようにならず、自分を取り巻くはのま残らず、自分を取り巻いです。(1993年1月9日の司牧書簡)

正義と愛徳

キリスト教的精神は、各個人に割り 当てられるものだけではなく、尊敬 と愛情を持って、厳密に必要以上に 与えるべきです。また、人々のため に自分自身を捧げることを要求します。特に英雄的な振る舞いで正義を実行しなければならないとき、愛徳こそは、強力な力です。こうしてのみ、人間の尊厳にふさわしい働きができます。つまり「神の子たちにができます」(『知識の香』36番)。(『Scripta Theologica』(1981)13, p.383-p.401.『Rendere amabile la veritá』p.264-p.265に記載)

家族生活の聖化

結婚生活は、自分自身を捧げること、惜しみない心を持つこと、謙遜などすべての徳の学び舎です。夫こでです。大きなだは、週間ではあるでしょう。たとえば、週間であるでです。あなたは他のません。と考えていたもし、変はとても敏感になって、どんなことでも察することがで

きます。夫は別の計画を考えている ということがわかると、あなたは自 分の計画については黙り、次のよう に言うでしょう。「ねえ、これをし てはどうかしら。」すると夫は大い に喜ぶはずです。皆こういう風に 夫は妻に、妻は夫に対してするで しょう。これは一つの神の祝福で す。

主がお望みになる夫婦生活をするな ら、霊的な一致がもたらされ、共に 喜び合うことができるでしょう。つ まり神への愛に導かれるのです。夫 は妻が、妻は夫が、より立派になる よう助け合うことができるようにな ります。あなた方が婚姻の秘跡を受 けたときから、言葉では説明しきれ ませんが、秘跡による特別な恩恵を 与えられているからです。互いに愛 し合っているなら神が共におられる のです。そして、愛し合う時には理 解し合っています。時々少し難しい ことがあっても理解し合わなければ なりません。愛情は与えるよりも理解することにあるのですから。 (1987年11月22日、ダブリンでの家族の集まりでのメモ)

子供たちの教育

「あなた方のもっとも大切な仕事は皆さんの子供たちの教育ですよ」とオプス・デイ創立者は企業家たちによく話していたものです。効果だちな育をするには、子供たちの友だちになることです。幼いときからならです。はできるようになるでしょう。

現代の生活リズムは、子供たちとのこのような関わりが難しいように思えます。ますます私たちは、時間を失い、その他の持ち物は多くなってきています。両親は、子供たちのより良い未来のためにという高貴な望みのためとは言え、仕事に追われ、疲れきっています。しかし、子供た

ちの将来は、子供たちに与えた快適 な生活よりも、彼らと個々に関わっ た時間によるのです。こういうわけ で、子供たちが嘆くのは、両親が与 えなかったことについてではなく、 彼らに関わってくれなかったからで す。

(1989ローマ、教会の使命における 信徒の使命についての記事「Sal, luz y fermento」『Catholic Familyland』Issue XXVII, p.11-p.14)

日常生活において観想者となるため に

私たちにとって「社会の中で観想的な人」になるとはどういうことでしょうか。簡単に言えば、愛に動かされ、天国で顔と顔をあわせて見をした希望を持ち、この光で全ての内に神を「見る」は、です。聖パウロは「今私たちは、とです。ようにぼんやりと見ているが、しかし、そのときには、私が知

られている通りに知るであろう」(1 コリント13,12)と書いています。 (1991年11月1日の司牧書簡)

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/alvaro-shiryo/ (2025/11/16)